

軍、王室、政党の均衡関係がカギ

◎総選挙後のタイ政局

村嶋英治

「政治を遊ぶ」タイ文化

タイ語で「政治をする」はレン・カーンムアンという。カーンムアンは政治であり、レンは遊ぶという意味だ。つまり、日本語の「政治をする」は、タイ語では「政治を遊ぶ」と表現されている。実際にタイ人は政治を遊び、政治を楽しんでいる。政治ははじめにやらなければならないと考えがちな日本人には、政治を遊ぶタイ人の政治生活はなかなか理解できない。

今回の三月十九日の国会解散、四月十八日選挙、五月七日の組閣の過程にも「政治を遊ぶ」タイ人の政治文化がよく表れていた。その一つは、選挙では政治家の巧みな話術と雄弁を聴きに数万人の聴衆が集まってくることである。しかも、特に人気高い政治家の演説はテープにして売り出される。選挙前日の四月十七日には王宮前広場や外務省前広場は、十万人を超える聴衆でうまり、タイ市民党

のサマク党首や民主党の雄弁家たちの演説を楽しんだ。選挙演説会は選挙戦に入るや、毎日各党主催で数万人の聴衆が集まって開かれるのである。

「政治を遊ぶ」文化は、政治家の行動に最もよく現れている。政治家は、政治をゲームのごとくとらえ、自らの発言には拘束もされず、責任も問われない。もともとこの国の文化は、言行一致にはそれほど価値を与えない。言葉はその時々都合に合わせて発せられ、政治ゲームの一手段にすぎない。このことをよく示したのが、憲法改正論議から選挙において、社会行動党と民主党とは自らを民主主義を擁護する党であり、タイ市民党は独裁に協力する党だと言葉をきわめて攻撃したにもかかわらず、選挙後この三党が意外にも連立内閣をつくったことである。

思い出すのは一九八一年四月一日のヤングターク・クーデターの時のことである。反ヤングターク側は王室を擁し、ヤングタークは王座を破壊す

る者だとラジオで攻撃し、人民を動員した。しかし、この事件が済んでしまうと王室側スポークスマンは「ヤングタークが王座を倒すはずなどない。ああ宣伝したのは心理戦術だ」と平気で発言した。タイ政治家の主張や発言ほどあてにならないものはない。ここでは民主主義とか独裁、王制打倒など実に深刻な問題も、権力獲得のための政治ゲームにおいては心理戦術の手段とされてしまうのだ。

このような「政治を遊ぶ」タイ人の政治文化の背景には、政治組織の制度化が進まず、個々の政治家の行動が拘束されていないという政治構造の特徴を指摘できよう。タイ政治は組織よりも個々の指導者を中心に動いている。このような政治構造は個人カリスマを生みやすく、このようなカリスマによって政治状況が大きく変わることになりやすい。大政党である社会行動党やタイ市民党もそれぞれ、その党首であるククリット・プラモートやサマク・スントラウエートの名とともにあり、

両者がいなければ両党とも存続できるかどうか疑わしい。この両者ほどには心服者はいないにしても、軍部の憲法改正強行に反対したチャヌア、ン

(導火線)運動のアナン・セーナーカンや元ブレム首相秘書官のチャムローン・シームアンなどのカリスマ的個人が一定の影響力をもつ余地がタイ政治の中には多分に存在する。

以上、日本とは異質のタイ政治について注意を喚起してきたが、以下、総選挙から組閣に至る政治過程をみてみよう。

軍の圧力で突然解散へ

三月十九日のブレム首相の突然の下院解散と四月十八日選挙の発表は、ブレム内閣の主要閣僚や与党にとっても全く寝耳に水の事件であった。それもそのはず、この解散はブレム首相とアチット陸軍司令官など数人の協議で実施されたのであった。もともと六月初旬に任期満了による総選挙が予定されていた。

しかし、四月二十一日に憲法の経過規定の期間が切れると、政党中心の選挙方式にかわり大政党に有利になる。陸軍は、自らに対抗する社会行動党、タイ国民党および民主党などの勢力拡大を恐れて、四月二十一日前に旧来の方法による選挙を実行させたのである。つまり、旧来の方式では投票者は一選挙区の定数いっぱいまで党にかかわらず選択投票できたが、憲法の新方式では全県一区

になるのみならず、投票者は政党名を選んで一票のみ投票し、その県で最大得票の党がその県の全議席を独占することになるのである。

陸軍により推進され三月十六日の国会で否決された憲法改正要求は、①上記の旧来どおりの選挙方式、②一般公務員(現役軍人)の閣僚兼任可、③上院(主に現役軍人が任命される)の内閣不信任権維持——を認めた経過規定の延長を内容とするものであった。政府与党の社会行動党、民主党、タイ国家党の三党がこぞって陸軍の要求をはねつけた。陸軍は経過規定の期間が切れた後には、軍部がそれまでもついていた政治的足場を失い、現役軍人が閣僚になることもできず、とりわけ野心家のアチット陸軍司令官は、陸軍内に地位をもったまま首相になることができなくなった。また、現役軍人が多数任命され軍人内閣の国会での支えとなっていた上院も、権限を失い無力となった。

この憲法改正の国会審議の過程で陸軍は二月十六日「憲法改正問題についての陸軍の方針」、いわゆる陸軍白書を出し「タイ軍は共產主義に勝つための政治攻勢として一九八〇年首相命令六十六号に従い、タイの民主化を推進している。故に上院は職能代表任命制にして、強い上院を残さねばならない。資本家だけの代表しかない選挙制下院より、職能代表上院の方がより民主的であるから。職能代表上院には、一職業である一般公務員も当然任命されるべきである。そして議院内閣制

◎第四次ブレム内閣の主要閣僚

(5月7日発足)

| | |
|--------------|---------------------|
| 首相兼国防相 | ブレム(留任) |
| 副首相 | ピチャイ(新任、民主党党首) |
| ソンチー | (新任、タイ市民党) |
| ブンテン | (新任、社会行動党) |
| ブラチュアブ | (留任、諸派) |
| 蔵相 | ソンマイ(留任、民間人) |
| 外相 | シチ・サウエトシラ(留任、社会行動党) |
| 農相 | ナロン(新任、社会行動党) |
| 運輸・通信相 | サマク(新任、市民党党首) |
| 商務相 | コーソン(新任、社会行動党) |
| 内相 | シチ・チラロート(留任、退役軍人) |
| 司法相 | ビボブ(新任、タイ市民党) |
| 科学・技術・エネルギー相 | ダムロン(新任、民主党) |
| 教育相 | チュアン(前農相、民主党) |
| 保健相 | マルト(前司法相、民主党) |
| 工業相 | オブ(新任、国家民主党) |

である以上、上下両院議員から内閣がつくられるのは当然だ」と陸軍の知恵袋ブラサート・サップ・スントンの詭弁に近い論理で、上院の権限存続と現役軍人の閣僚兼任を正当化し、経過規定の存続、すなわち改憲を主張した。

また、陸軍が改憲を推進し始めた今年に入ると、陸軍のラジオ放送局に「ニュース解説」(ラビア



プレム首相も軍は無視できない

ン・カーオ)の番組をもうけ、毎朝六時から軍に協力する学者を使って、公然と改憲に反対する政府与党の社会行動党、民主党への攻撃を行った。

政府の一機関であるはずの陸軍が、政府与党と相対立する主張を公然とやることは、タイの政治権力は公式上の内閣や国会に必ずしも存しないことを示している。陸軍は自らに協力するタイ市民党やサイアム民主党など国会野党を使い国会での改憲を推進するとともに、政府にはクーデターをちらつかせて圧力を加えた。

三月末、憲法改正反対の運動を行ってきたアナ・セーナーカンが不敬罪覚悟で王宮前広場の聴衆の前に暴露したところによると、国会での改憲に敗れた陸軍首脳は王妃とともにクーデターを検討した。つまり、三月十八日アチット陸軍司令官、チャワリット陸軍参謀長補、ピチット第一師団長

の三人は、サマク・タイ市民党党首の橋わたして王妃と密会し、クーデター実施を協議した。

更に翌十九日には、同メンバーはプレム首相の出席を求め、クーデターか国会解散かの選択を迫った。このため十九日、国会解散が青天の霹靂のごとく発表されたのである。七〇年代半ば以後、タイ王室、中でも王妃の威光を利用する王妃お気に入り軍人や政治家の存在が目立ってきた。これは王室を政争の中に巻き込むものと老ロイヤリストは、苦々しく思っている。アナンはこのような立場から王室内の亀裂を暴露し、王妃・皇太子を諷めようとしたのであった。

「票の頭」と演説が選挙を制す

三月十九日、解散で政党は急ぎ選挙戦に突入した。軍の改憲を阻止した第一党の社会行動党は、ククリット党首の「考える時間もない。社会行動党を選んでおこう」という皮肉なボスターを市内の至る所に掲げた。三月二十四日、ククリットは十万人が集まった王宮前広場での演説会で、「陸軍内の一部指導者が独裁に戻ろうとしている。今回の選挙は民主主義擁護の政党と独裁志向政党との闘いである」と位置づけた。彼はまた「独裁は官僚の力を高め国民の頭を押さえるだけだ。独裁に戻ったり民主主義になったりの繰り返しでは経済に悪影響を与える。民主主義のために最後まで闘う」と演説し聴衆の大喝采を博した。

またククリットは陸軍が経済体制までも問題にし、ビジネスエリートと背景とする政党攻撃に出たのに対し、自らの新聞「サイアム・ラット」で、軍はコミュニストから計画をうけていると非難した。つまり、政党は資本家の代表であり、国民の代表ではない。軍が国民代表の立場から政治に関与すべきだ、と軍部の政治関与の正当性を主張する軍部の政治理論家ブラサート・サブブストンが以前タイ国共産党中央委員であった点を衝いたのだ。

民主党もタイ市民党を独裁に協力する党であると攻撃した。民主党の有力者ダムロンは四月十一日演説会で、陸軍が改憲に反対した社会行動党、民主党、タイ国民党の党首と幹事長をできるだけ落選させるという計画をつくったという秘密文書を暴露し、軍の独裁批判を選挙の争点にすえた。もちろん今回の選挙結果は、上記のような争点だけについて有権者が判断して決まったわけではない。政治情報に接触のチャンスが多く、政治意識の高い都市の教育ある層を除けば多くの国民の投票は別の要因によってなされたものとみた方がよい。

タイの選挙キャンペーンは主に、フウアカネーを使う方法と演説の方法の二つによっている。フウアカネーとは「票の頭」という意味である。各地区で票を集める力のある有力者、たとえば雇用主、商人、村役人、教師さらにはヤクザまでを「票の頭」として組織するのが集票の方法で

れまでの同党に対する非難を中止した。

一方、独裁とか民主主義とかは問題にならない地方の選挙区にはりついて「票の頭」方式で選挙戦を戦ってきたタイ国民党の幹部たちは、同党が七十六議席をとり第二党になると、直ちに組閣のイニシアチブをとるべく、社会行動党、民主党以外の政党を集めて多数派工作を開始した。

タイの政党にはイデオロギーで対立する政党は存在しない。どの党も人脈上、個別利益上の集まりであり、その議員たちは国会議員であることより国会議員になって閣僚ポストを得ることを目的としている。議員の大臣熱は高く、そのために四十四ものポストがつくられている。政党間に基本的対立がない以上、ポスト配分で話し合いがつけば、どの党との連立も可能である。そのため、過半数を制する政党のないタイで、選挙後は常に連立のための組み合わせ（スート）が多数でき、組閣に時間がかかる。

選挙後タイ国民党は、少数党を集め多数派工作に成功した。同党はまず四月二十六日の下院議長選挙に勝ち、更に下院での過半数支持を背景にその党首ブラマンが国王より首相に任命されることを期待していた。一方、社会行動党の幹部はタイ国民党の動きを、たとえ下院で三百の支持をえても軍の支持がない限り組閣は不可能なのだと冷ややかに見ていた。陸軍首脳はブレム首相再任の支持を公表していた。

四月二十六日の下院議長選挙は、一六四対一五九でタイ国民党グループの勝利に帰した。これに先立ち二十五日夕、ブレム首相は条件の多いタイ国民党主導の下では首相になる意思のないことを表明した。

議長選を五票差で敗れた社会行動党、民主党の結束は固く、ククリットはタイ国民党とは連立しないこと、ブレムの首相再任を求めると、を発表した。この社会行動、民主両党を軸にすめられた連立工作では、両党が最も激しく独裁の党と非難したサマクのタイ市民党が意外にも加わることになった。このタイ市民党の参加は陸軍の後押しを得たと言われ、同党は陸軍から「預けられた子」というニックネームを新聞につけられた。

下院議長選ではタイ国民党側についたサマクの離反で同党を軸とする組閣の途は絶たれた。万年与党を欲するブラマン党首はブレムに会って無条件の入閣を希望するが、既に絶対多数を得ているブレムは受諾しなかった。改憲審議の過程でしばしば態度を変え「ウナギの党」と批判されたブラマン党首も、民主党が豹変してあれほど敵対していたタイ市民党と連立内閣に入ったことをウナギ以上のすべりかただと皮肉って敗北を宣言した。

四月三十日にはブレム首相が新首相として任命された。民主党内でもさすがにタイ市民党と同一内閣に入ることの是非が議論されたが、五月四日党議は入閣を決定した。五月七日、ブレム首相の

下に社会行動、民主、タイ市民、それにクリアンサク元首相を党首とする国家民主党が加わった四党連立内閣が発足した。

ブレム新政権の今後

今まで述べてきたことからわかるようにブレム新政権は、国会多数派の支持だけによって成立したわけでない。議員でも政党の党首でもないブレムが首相の座につけるのは、王室と軍部の支持を得ているからである。

現在ブレム与党の社会行動党と軍部との間には妥協が成立したように見える。その妥協が何を意味するかは今後明らかとなろう。しかし、社会行動党、民主党の両党はブレム政権が改憲しないことを条件に入閣しており、一方、軍部はタイの歴史とともに古い軍人の政治関与の伝統を捨てたわけではない。そして現行憲法は現役軍人が閣僚になることを拒んでいる。政治的野心が強いアチット陸軍司令官にとって次期首相をめざすには、改憲かクーデターしかない。陸軍が改憲に動くと言内にも亀裂が生じ、与党になることを狙っているタイ国民党は内閣不信任成立のチャンスを得ることとなろう。そしてこのような政治混乱は陸軍のクーデターに口実を与えることになるかもしれない。今後のタイの政局も陸軍、王室、政党の相互関係の中で決まっていくことに変わりはない。

(むらしま・えいじ「アジア経済研究所調査研究部」)